

有四極山亦讀云四波都山都須皆一音之轉可以徵矣 熙按元日曰四始言歲之始時之始日之始月之始也四極卽四者之極也極月猶言窮稔窮月也四始見潛確類書窮稔窮月見月令廣義

〔倭訓栞前編十一〕志 亥はす 十二月をいふ歲極るの義なるべし萬葉集に昨日社年者極之賀と見えたり俗に此月を極月といふもはつる月の義也漢にも歲終といふなり

〔古今要覽稿時令〕令 亥はす 亥はすは十二月の和名なり師走又四極ともかけりさて此月の名の始てみえしは十有二月丙辰朔壬午至安藝國日本書紀神武天皇紀書記されたれど是より前に月々の

名目ありし事は既に上にしるす如し和歌に此月の名をよめるは十二月爾者沫雪零跡不知可毛萬葉集みえなにとなく亥はすの空になりけりと秘藏抄又物へまかりける人を待て

亥はすのつもごりに古今集詞書にしるせるをおもへばあがれる世には今の世の十一月十二月と音をもてよばずして古今集亥もつき亥はすととなへし事明かなりさて此月の名義を解はじめ

たるは十二月僧をむかへて經をよませ東西にはせはしるが故に師走月といふをあやまれりと奥義抄いへれどいと覺束なし下れる世の説なれどもシハスといふが如きシとはトシといふ

詞のひと度轉せし所也ハスといふはハツなりスといひツといふもその語の轉せし也我國の語に凡事の終りをばハツともハテともいふなりされば萬葉集に極の字讀てハツともいへば

俗に極月の字を用ひてシハスともいふなるべしと東雅辨じたるこそその當の説にしてはるかに勝れたれ加茂眞淵谷川士清楫取魚彦藤原宇萬伎等の四人の説自己の考の如く此月の名義を

辨じたれども皆前に辨じたる所の東雅の説なれば是によりしならんさて此月の異名を年はつむ月と秘藏抄いひ暮古月親親子月と莫傳抄いひ春待月梅初月三冬月と藏玉集いひをとこ月と年浪

〔日本書紀三神武〕戊午年十有二月